

現代のあるべき父親像とは

榎 木 満 生

頑固おやじのイメージ像からの出発

昔の父親はエラかった。感情をあらわにしてチャブだいをひっくり返して怒れば、それだけで父親の威厳が保てたし、母親も子どもも父親の存在を認めてくれた。感情をあらわにしてどなっても妻子がついてきたのは、「お父さんは世の中を知っており、言っていることは真実だ」という信頼関係が家の中にあつたからである。しかし、いまは世の中が複雑にめまぐるしく変化をしており、父親の観点は社会における一部の考え方を代表しているだけである。こういう時代においては、父親も以前のように単純には叱れなくなった。叱ってもすぐに「こういう例外がありますよ」と切り返されるだけだからである。

最近、幼児にとって父親というものの存在は分かりにくいものであるらしい。幼児に「おうちの人達全員の絵を書いてください」という題を与えると母親像は

明確な線で書いてくるが、父親に関する絵はどうもはつきりしないところがある。いまの幼児にとってどうも父親とは物わかりの良い友達であり、兄弟に近い存在に思えるようである。しかしこれで本当に父親は家庭の中のあるべき姿だとは思えない。本当に子どものためになる父親像とはどのようなものか考えていきたい。

幼児にとって父親存在はどうかあるべきか

幼児にとって良い父親像とは、どのようなものなのか考えてみよう。

欲しがるものを何でも与えようとする父親は

事例1 四歳児女児 いろんなおもちゃを次々と

欲しがり、買い与えてもすぐに飽きてしまい、また、新しいおもちゃを欲しがる。だから子どももの部屋は足の踏み場がないくらい散らかっているが

さらに新しいおもちゃを欲しがる。友達の中でおもちゃを持つことが、一つの流行になっているから欲しいと言われると買ってやることになってしまふ。どうしたら良いだろうか。

少子化時代のいま、父親は子どもに良い顔を見せようと無理をする。一番簡単に子どもに気にいられる方法は、欲しがるものを買ってやる方法である。だから、子どもは努力することなしにいろんなおもちゃを手にいれている。その結果は子どもは何でも手軽に手にいれ、ろくに遊びもしないおもちゃをただ集めるだけで飽きやすい子どもになってしまうのである。子どもが望むままに買い与えることが、子どもをダメにする第一歩になっていることに注意をすべきである。親がどれだけ無理をしているかは子どもには分からないので子どもは衝動的になり、何でも欲しいものはすぐに手にはいるのがこの世の中だと思ってしまう。

子どもが欲しいものを手にいれたいと思ったとき

は、子どもの成長の一つのチャンスである。子どもは時間をかけて親を説得し、なぜ必要なかを親に力説する。そういった親子の対話の中で自分にとって本当に必要なものとは何か優先順位がつけられ、自分を見つめられる子どもに成長していくはずである。親を説得する技術はやがて社会に出たときには他者を説得する能力へ進歩していくはずである。

親が果たせなかった希望を子どもに託す父親は

事例2 五歳児男児 父親は若いうちにスポーツの一流選手を目指し、将来を嘱望されていたが、高校時代に怪我をしてしまい、断念して平凡な会社員になった。そのために子どもには小さい頃からスポーツ塾へ行かせている。さらには英語教室や各種の学習塾に通わせている。最近子どもに疲れが見えるようなのだがこれで良いだろうか。子どもの早期英才教育が盛んになっている。しか

も、これがいくつかの塾通いと重なり、子ども達が疲れてしまうようでは、子どもの将来にとって大きな問題である。一流選手になるためには幼児のうちからトレーニングすることが望まれるかも知れないがそれを平行していくつか学ばせても、子どもにとっては疲労を残すだけで、発達のにはむしろマイナスの要因になってしまう。本当に子どものうちから学ぶべき必要なことはどれか選択すべきであろう。

むしろ心配なのは父親の考え方である。子どもは親の希望を達成するために生まれてきたのではなく、別の人格をもった人間である。父親の才能を子どもが本当に受け継いだかどうか分からないうちから、父親がこのように子どもの進むべき方向を決めてかかるのは無理がある。子どもが自ら望んで学びたいのには、時間をかけてゆっくり話し合ってみる必要があるのではないかと思われる。

子どもの前で平気で感情的言葉を口にする両親は

事例3 五歳児女児 はにかみ、場面緘黙、チックなどの諸症状が現われた子どもを中心とした家族療法で治療を行っているうちに見えてきたのは、

むしろ夫婦関係の問題であった。この夫婦は、夕食でアルコール摂取後、子どもの前で口喧嘩するのが日常的になっていた。両親の長時間の喧嘩によって子どもは毎日家庭でいたたまれぬ思いをさせられて症状出現になっていたのである。

子どもにとって両親のいさかいはたまらなくつらい経験である。子どもにとって、両親の喧嘩はどちらに応援することもできず、身の置きどころがなくなつただ黙って見守るだけである。特に子どもの前で子育てをめぐっての議論は避けるべきである。子育ての方針をめぐる議論はどこか子どものいないところで行うべきである。家族療法では、子どもの前では世代間境界を明確にし、親世代の両親は終始一貫した態度で子ども

世代に対応することを求めている。家庭は精神的安らぎを求めべき場所であり、子どもに安心感を与えるべきであるからである。

子どもに対して友達のような父親は

事例4 三歳児男児 父親は自動車や乗り物に興味をもち、子どもに最新型の自動車や新幹線や飛行機などの写真や模型を見せてはその話をしていった。やがてこの子どもに対して言語発達の遅れがないのに自動車の車体の一部を見ただけでメー



カーや年式をあてられるようになっていたという。

父親が子どもと話をするときには無意識に相手の発達段階に合わせたテーマや語調をかげんするものである。しかし、この父親は三歳の子どもに対して自分の趣味をそのまま同年配の友人にでも話す語調で話しかけていた。子どもはそのような父親からの話に対して言語的な応答よりも、カラー写真などの非言語的印象が強く残ったのである。だから、言葉を覚えるより先に、車体の一部を見ただけでメーカーや年式が区別ができるようになっていた。でも本当にこの子どもを育てるために必要だったのは、年齢に相応した言葉かけだったのである。

今度は父親機能の復権を

一軒の家の中で母親が幼児に対して保護的養育的役割を担うのに対して、父親は社会的規律や約束事に対する厳しさを教える役割を担っている。現在日本社会

は社会全体が寛容で保護的な社会であり、父親役割の機能が弱く、基準や規則の適用の中に厳しさが欠けていると言われてから久しい。教育環境の中で問題になってきたいじめ、校内暴力、登校拒否、援助交際などの諸問題の原因として、社会全体の道徳的規範、倫理的基準の欠如を挙げている識者も多い。

考えてみると昭和三十年代の高度成長期以来、会社の残業で日本の家族のなかから父親の姿が消え、その後長い間母親を中心にした子育てが日本の家庭の中に定着してきた。このような母親中心の家庭の中で昭和後期の子ども達が育てられてきたのである。平成の不景気の時代になってようやく父親が家庭に帰ったものすでに子育ての中から父親機能が崩壊して久しくなっていた。いま、子ども達にもう一度社会の厳しさを教え、社会との接点を取り戻すために必要なのは父親機能を家庭のなかに取り入れることである。

父親の役割認識の始まり

父親は、子どもが生まれたときに自然に父親としての意識が生まれるのではない。日頃の家庭の中でわが子に接して意思の交流を行っているうちに、子どもが弱さに気付き、父親の自分が頼りにされている存在であることに自覚したときに始まるのである。しかし、その護り方は母親のように直接子どもに触れて援助するのではなく、外敵から家族を護るといふ態度で表れてくる。また、社会的倫理基準をわが子に当てはめて無事に社会生活を送ることができるといふか教育するといふ形をとる。

よく父親が娘の帰宅時間をうるさく干渉するのは、社会にその種の事件がよく起きることを知っているからであり、父親としては娘を護るために注意をしているのである。一度約束をしたらその約束を確実に護るように要求するのもそれが基本的社会のルールだから

である。つまり、父親機能は、「この子をこのまま社会に出したら社会生活を円滑にやっていけるだろうか」といふことが基準になっている。

この父親機能は、母親の保護的機能と組み合わせ、て効果を發揮する。そのためには、父親と母親は子育ての期間それぞれ機能が異なる立場から意見の調整を必要とする。父親機能と母親機能は一緒になって伝えられてその機能を發揮するのである。

とまれ、父親が子ども達に伝えたいのは、父親自らが実社会の中で体得した社会規範である。

(お茶の水女子大学)